

書写と読誦 —法華経の文字と声— (要旨)

浅田 徹*

法華経は、普通に考えれば「日本の典籍」ではあるまい。我々のイメージする経典の姿は、中国の文字である漢字が並ぶのみで、それだけでは理解できない。また、法事での読経は漢字音の直読（つまり中国語）で行われるのが通例で、ほとんどの日本人は全く意味がわからない。しかし、写経で書き下し文を写す人は稀だし、読み下しの読経を聞きたいと言う人も多くはないのである。こうした享受のあり方は、経典の一文字一文字、またその中国音そのものが聖なるものであって、変更することができないと考えられてきたことによる。

こうした現象は、自国語でない聖典を戴くことになった地域では常に起こりうる。カトリックの典礼においては、世界中どこでもラテン語典礼文を（聴衆には意味がわからないのに）読み上げていた。現代ではその地域の言語でミサを執行しているのだが、信者のラテン語への郷愁は未だに存する。

意味のわからない声音や文字列は、言語がコミュニケーションの道具であるとすれば、機能不全の記号でしかない。書物が、知識・情報を伝えるための器であるとすれば、日本における漢訳仏典は、本当の意味では書物になりきっていないものであるとも言える。

それでもやはり、漢訳仏典は日本のものなのではないだろうか。意味がわからぬ音声・文字列であっても、それを自らが発し、また書き写すことが、何かの価値に参与し、新たな価値を作り出す

ものであるならば、それは日本人の活動の成果として認めなくてはならない。そこに、法華経を日本の典籍と捉える意義がなお存すると見たい。

本報告では、歴史的な状況を知るために、源氏物語や狭衣物語における経典引用が、一般の漢籍引用と違って訓読によらないこと（直読であること）、法華百座聞書抄に載せる、法華経書写の功德を語る説話から、経典の一字一音が聖なる力を持つものであると喧伝されていたことを確認した。

一方、そのような保存の意志にも関わらず、経典の存在形態は変容していく。

中国音で直読している音声も、次第に日本語の音韻構造に同化していく。それにメロディーを付けて歌うことも行われたが、それは「日本の」歌なのではないか。あるいは、写経の文字は中国の漢字だが、日本では次第に日本風の漢字書体に変貌していく。美しい料紙に和様の書美を揮う装飾的な写経は、「日本の」書なのではないか。また、経塚から出土する、朴訥な字体による法華経も、日本人の表現なのではないのか。

仏像はインドから中国、朝鮮半島、日本と伝わって来るに従い、また日本でも飛鳥時代から平安、鎌倉と時代を経るに従って、明らかに容貌が変化していく。諸仏はインドにいたるのではなく、それを信じ、表象する人々のもとにあると言うべきである。

本報告では、説明のために長崎県の「かくれキリシタン」の人々の守り続けたラテン語聖歌や、イエスやマリアの画像が日本風に変化した例をも挙げ、神聖な表象の変容と土着の例とした。

*お茶の水女子大学教授